

本日ここに、日本工業大学設立50周年記念式典を、多くのご来賓や本学関係者の皆様のご臨席のもと、執り行うことができますことは、本学にとりまして誠に光栄なことであり、ご多用中にもかかわらず、ご臨席賜りました皆様に、日本工業大学を代表いたしまして、心より御礼申し上げます。本学が50年の節目を迎えることができましたのは、50年のそれぞれの時期における皆様や先人の方々の尽力の積み重ねによるものでございます。この場をお借りし、衷心より感謝と敬意を表する次第でございます。また、今回の新講義棟の建設をはじめとする周年記念事業に対しましては、趣旨に賛同頂き、皆様から厚いご支援ならびにご寄付を賜りました。重ねて、御礼申し上げます。

本学は、理事長の挨拶にもありましたように、全国の工業高校の念願であった、工業高校生の大学進

には、体験的な学びを工業高校の後輩たちの教育に還元したいと、教職を目指す学生が多く含まれています。その結果、全国の工業高校で、900名を超える、多くの本学出身の教諭が今も教鞭をとっています。これは、本学の大きな財産であります。教員の指導で努力するのではなく、自ら夢中になってトコトン課題に取り組む、それを社会に還元する。これが本学の学生気質であり、培ってきた良き伝統であります。

私が本学に奉職したのは、ちょうど設立30周年を迎えた平成9年であります。当時は入学生の9割が工業高校出身者で、工業科向けの「一般入試」を行っていました。数学・英語各100点、機械・電気・建築などの選択専門科目が200点という配点でした。建築学科に在任して早々に携わったのが、この専門科目の問題作成であり、「建築計画」など初め

代表されるIT技術が全ての産業に浸透する知的集約化社会、Society 5.0に対応する人材、21世紀型スキルを備えた人材を、学士課程でいかに育成するかということです。本学は、工業科中心から普通科への学生層の広がりや合わせ、二重の意味で急速な変化に晒され、対応を迫られています。

このような変化を受け止め、新しい時代に立ち向かうべく、次の半世紀のスタートとなる今年、日本工業大学は学部・学科改組と大幅な教育カリキュラムの改編を行いました。今回の改組では、「実工学教育」という伝統を継承しつつ、これからの社会の変化にも対応できる人材を育成するために本学が進化すること、「継承と進化」を基本コンセプトといたしました。ディプロマポリシーでは「現場で創意工夫できる技術者、技術で新たな価値を創造できる人材」の育成を謳いました。前者の「現場で創意工

いきます。このような「俯瞰力」に加え、今社会から求められているのは、「変化に対応する力」「自ら考え続ける力」そしてコミュニケーションの基礎となる相手の立場を理解する「想像力」、相手の想いを感じ取る「感受性」です。今回の改革では、まだまだ十分ではありませんが、これらの力を身に付けさせることにも注力致しました。

このような、いわゆる「市民」として、「人」としての素養を身に付けさせることは、文部科学省がすすめてきた大学改革実行プラン、学士課程教育の質的転換の中でも強調されている課題です。TeachingからLearningへのシフト、アクティブラーニングやポートフォリオなどの教育方法や教育ツールの導入が、各大学に今求められています。これらの多くは、本学では今まさに継続的な課題として取り組んでいるところです。

そうあらなくてはならない。大学の中で変化を生じさせるメカニズムをどのように維持していくのか、そのことが今問われていると思います。そして我々教職員は、学生が置かれてきた環境をイメージする「想像力」と彼らの発する言葉や態度の意味を受け取る「感受性」を持てているのか。彼らにそのような資質を身に付けさせる前に、自らを振り返る必要があると思います。大学が置かれている状況の責任を外部に求めるのか、内部に求めるのか。現実を自ら受け止め、その上で我々は、学生たちに何を語り、生き様として何を示せるのか。その姿勢をぶれない軸として、本学に真に必要な改革を自ら見定め、自ら判断し、「内発的な大学改革」を進めることに方途を尽す。社会がこれからの大学に求めている本質は、ここにあると確信しています。

これからも、生涯にわたる「学び方」を身に付ける場として、価値ある、選ばれる、社会に貢献する大学であり続けるために、教職員一同、全力を挙げて取り組んでいく所存であります。



学生に真摯に向き合い 内発的な大学改革を実行



学 長
成 田 健 一

学の隘路を打破するという関係者の熱い想いと、当時の我が国の技術教育に一石を投じるという高い志から生まれた大学であります。当時は約60万人の生徒が全国の工業高校で学んでいました。本学は、その中から、さらなる学びを志す優秀な進学希望者を集め、入学直後から高いレベルの実験実習、製図課題などの教育カリキュラムを提供し、工業立国として発展する日本を支える多くの実践的技術者を世に輩出してきました。この長い伝統の中で工夫を重ね、切磋琢磨して確立された「実工学の学び」は、体験しながら理論を学び理解を深化させていく「デュアル・システム」として今も息づいています。それを支えてきた実習用の設備・装置の数々は、今なお他の工業大学を圧倒する本学の大きな資産となっています。工業高校で学びの楽しさと喜びを感じ、自らの専門性をさらに高めたいという明確な学びの目標を持った学生が本学に集まってきています。その中

て見る工業高校の教科書と格闘したのを覚えています。また、その後導入したAO入試では、模型製作や、デッサン実習、実物の椅子をその場で測量しながら図面化する作図など、工業科での学びを活かす入試を工夫してきました。建築学科以外でも、各学科が創意工夫にあふれた課題を考案し、今思い起こせば、昨今の入試改革で議論されている方向性を先取りした、先進的な取り組みであったと再評価できると感じています。

さて、その後20年という時を経て、本学を取り巻く環境は大きく変化しました。工業高校の生徒数は、現在約25万人と大学設立時の4割に減少しています。この春の本学への入学生の工業科出身者の比率は39%で、すでに普通科出身者数が工業科出身者数を上回っています。あわせて、今全国の大学で課題となっているのは、AIやIoT、ビッグデータに

夫でできる技術者」は、これまで培ってきた本学の伝統を踏まえ、それを「継承」という宣言であり、後者の「技術で新たな価値を創造できる人材」は、変化への対応とイノベーションを意識した「進化」することの宣言であります。新しいカリキュラム、特に工学基礎教育プログラムでは、学生がトコトンやり抜く環境を創りだし、同時に、学修支援センターなどの学びのセーフティネットも充実させ、わかるまで教えるという覚悟も教職員に共有してもらいました。

本学は「実工学」を標榜しています。「実学」とは一言でいえば「役に立つ学問」と解されますが、役に立つかどうかの判断には、必ず価値観が伴います。自らの技術が今後社会の中でどう位置づけられるのか、時間と空間の双方から俯瞰できる人間であり技術者であることが今後ますます求められて

さらに、大学という組織は、社会との開かれた対話を通じて「自律的に、自らを、変革する」組織でなければなりません。学生に対して「変化に対応する」「自ら考え続ける」を求める前に、大学自身が

そうあらなくてはならない。大学の中で変化を生じさせるメカニズムをどのように維持していくのか、そのことが今問われていると思います。そして我々教職員は、学生が置かれてきた環境をイメージする「想像力」と彼らの発する言葉や態度の意味を受け取る「感受性」を持てているのか。彼らにそのような資質を身に付けさせる前に、自らを振り返る必要があると思います。大学が置かれている状況の責任を外部に求めるのか、内部に求めるのか。現実を自ら受け止め、その上で我々は、学生たちに何を語り、生き様として何を示せるのか。その姿勢をぶれない軸として、本学に真に必要な改革を自ら見定め、自ら判断し、「内発的な大学改革」を進めることに方途を尽す。社会がこれからの大学に求めている本質は、ここにあると確信しています。



教育の新たな拠点となる多目的講義棟
(完成イメージ/2018年12月竣工予定)

平成30年6月10日

日本工業大学 学長 成田 健一